

東洋英和女学院

説 教 集

第 8 号



2025

表紙写真について — 東洋英和女学院礼拝堂 —

横浜校地にある東洋英和女学院礼拝堂は学院内外から多大なる支援を受け、一九九〇年七月に着工し、翌一九九一年三月末に完成、同年五月一日に献堂式が行われました。二〇二〇年以降にはパイプオルガンのオーバーホール、冷暖房設備設置、床改修、音響設備更新、外壁・防水改修が順次行われ、献堂から約三五年を経た現在も大学のキリスト教教育のシンボルとして大切にされています。コロナ禍で礼拝堂に集って礼拝を行うことができない時期もありましたが、オンライン礼拝も取り入れながら礼拝を守り続けてきました。春は桜、夏は緑、秋は紅葉、冬はクリスマスイルミネーションが礼拝堂の外観を彩ります。日々の礼拝や特別礼拝、クリスマス行事、コンサートに使用され、在学生・教職員のみならず、卒業生・保護者・地域の方も集う自慢の礼拝堂です。

東洋英和女学院

説 教 集

第 8 号

2025

目次

巻頭言

御言葉は人生の案内標識

時をよく用いて

「マタイ受難曲」

種は時かれています

迷いの中でも共に希望を築こう

―神の国のビジョンとエレミヤの光

院 長
学院宗教部長（六本木校地）

高橋 貞一郎……………4

院 長
学院宗教部長（六本木校地）

高橋 貞一郎……………8

学院宗教部長（横浜校地）

野田 美由紀……………12

大学人間科学部人間科学科教授

小坂 和子……………16

大学国際社会学部
国際コミュニケーション学科教授

平体 由美……………20

大学国際社会学部
国際社会学科准教授

堀川 敏寛……………24

用いてくださる神様を信じて

中 学 部 教 頭

柿 野 滋 子……………28

皆さんは今日どの斧を選びますか？

中 高 部 聖 書 科 教 諭

朴 洙 美……………32

七夕とキリスト教

中 高 部 聖 書 科 教 諭

上 野 峻 一……………36

御言葉に支えられて

小 学 部 教 諭

町 田 協 子……………40

祈り続ける

小 学 部 教 諭

小 國 翠……………44

神さまがみていてくださるから大丈夫

東洋英和幼稚園保育主任

渡 辺 み な 子……………48

ぶどうの木の下の

大学付属かえで幼稚園保育主任

永 瀬 真 澄……………50

巻頭言

戦後八〇年の節目に思う — 平和を造る者として生きる

院 長

学院宗教部長（六本木校地）

高橋 貞二郎

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」

マタイによる福音書 五章九節

今年、私たちは戦後八〇年という大きな節目の年を迎えています。今あらためて、平和の大切さを心にしっかりと刻んで歩んでいきたいと思えます。

聖書には、「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイによる福音書五章九節）という言葉があります。

新しい聖書協会共同訳では、この箇所が「平和を造る人々は、幸いである」と訳されており、平和をただ願うだ

けではなく、私たち一人ひとりが主体的に平和を造り出していくことの大切さが、より強く伝わってきます。

では、私たちは具体的に、どのようにして平和を造っていけばよいのでしょうか。そのヒントとなるのが、一三世紀のイタリヤで活動したフランシスコ会の創設者、アッシジのフランチェスコ（聖フランシスコ）に由来するとされる「平和を求める祈り」です。その祈りのことばは、次のようなものです。

神よ、

わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、

いさかいのあるところにゆるしを、

分裂のあるところに一致を、

疑惑のあるところに信仰を、

誤っているところに真理を、

絶望のあるところに希望を、

闇に光を、

悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、

理解されるよりは理解することを、

愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。

わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、

自分を捨てて死に、

永遠のいのちをいただくのですから。

〔聖パウロ女子修道会（女子パウロ会）公式サイトより〕

この祈りは、時代や場所を超えて多くの人々に語り継がれ、平和を造る生き方の指針となってきました。

その祈りの心が、英和生の中にも息づいていることを実感させられる場面がありました。今年の夏（七月九日）、中高部の朝の礼拝（生徒による讚美礼拝）のなかで、高校三年生が「平和を求める祈り」の一部を、自らの言葉でアレンジし、「英和生の祈り」として伝えてくれたのです。その祈りは、平和を願う思いをいつそう身近なものとして、共に礼拝を守っていた私たちの心に深く響きました。

聖書が語る平和（シャローム）は、単に戦争や争いが無い状態を指すものではありません。精神的にも、肉体的にも、物質的にも満たされ、何ものにも脅かされない、喜びに満ちた状態を意味しています。

そのような平和を実現するのは、決してたやすいことではありません。しかし、私たちが努力を怠れば、平和は徐々に失われていくでしょう。

「平和を求める祈り」のこぼれを受けとめながら、私たちも平和を造り実現させるために、それぞれの場でできることから始めていきたいと思えます。そして、共に、平和な世界を築いていく努力を重ねていきたいと願っています。

并。

御言葉は人生の案内標識

院長

学院宗教部長（六本木校地）

高橋 貞二郎

詩編 一一九編一〇五節

あなたの御言葉は、わたしの道の光

わたしの歩みを照らす灯。

（二〇二五年五月の大学チャペルでの説教）

皆さんは、道に迷ったことはありませんか。

先日、私は、自宅から少し離れた場所での会合に参加しました。県をまたぐため車での移動です。出発時にスマートフォンカーナビゲーションアプリで目的地を入力し、運転席にセットして案内に従って車を走らせました。途中までは、音声ガイドもあって、とても快適なドライブだったのですが、「あと少し」というところで、突然ナビ

ゲーシヨンが途絶えてしまったのです。

車を止めて確認すると、なんと長時間のアプリ使用で、スマートフォンに負荷がかかって本体が熱くなり、ナビゲーシヨンが使えなくなっていました。スマートフォンを使わず、少し休ませましたが、なかなか回復しません。会合の時間は、刻一刻と迫ってきます。

仕方なくスマートフォンのアプリを使わず、「確かこの方向だった」と勘に頼って車を走らせました。しかし、進むにつれて次第に不安になり始め、案の定、道に迷ってしまったのです。

再び車を止め「どうしたものか」と考えながら、ふと見上げると、案内標識が目に入りました。道路の上に設置されている、行き先を示す大きな看板です。

その標識に従って進むと、会場が見えてきました。そして、なんとか時間までに会場へたどり着き、無事に会合に出席できました。

私は、この経験を通して、道に設置されている案内標識のありがたさを改めて実感したのでした。

ところで、私たちの人生においても、同じような経験をする場面はないでしょうか。

私たちは、目標に向かっていているはずなのに、途中で迷い、悩むことがあります。「良い道だ」と思っただけで、自信を失ったりすることがあるのではないのでしょうか。

先ほどお読みした聖句は、そんな私たちの歩みにおける「案内標識」となるものがあると伝えていきます。それは、聖書の言葉です。

先ほど読みました聖句にこう書かれていました。

あなたの御言葉は、わたしの道の光

わたしの歩みを照らす灯。

「あなたの御言葉」は、神の言葉である聖書の言葉と言ってよいでしょう。「私の道」「私の歩み」、これは人生のこと。そして「光」「灯」というのは、迷わないように導くものことです。

この詩を書いた詩人は「聖書の言葉は、私たちが人生で迷わないように、目的地まで導いてくれるもの」。つまり、分かりやすく言えば、人生の案内標識、と言っているのです。

東洋英和女学院にも、学院の進むべき案内標識として大切に行っている聖書の言葉があります。入学式や卒業式で朗読される言葉です。それは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」という、新約聖書マルコによる福音書一二章三〇節、三一節の言葉です。そして、この言葉に基づいているのが、学院標語「敬神奉仕」です。

マルコによる福音書一二章の言葉や、学院標語「敬神奉仕」は、私たち学院に関わる全ての者の、歩むべき大きな方向を示しています。

ですが、日々の歩みの中では、順調に進む時であれば、思い通りにならず「どうしたら良いのだろうか」と思い悩む時もあります。

神様は、そんな私たちといつも共にいてくださり、私たちが求めた時には、聖書を通して、進むべき道を示し、導いてくださることを今日の聖句は伝えようとしています。

先月、入学式が行われ、一年生の皆さんは大学生としての生活が始まりました。二年生以上の学生の皆さんも新しい講義などが始まっています。新たな環境の中で、期待とともに、不安を感じている人もいるのではないでしょうか。また、この先、さまざまなことでも迷い、悩むことがあるかもしれません。しかし、どんな時でも導いてくださる神様が共にいてくださることを覚え、平安のうちに、希望を持って過ごしていただければと思います。

時をよく用いて

学院宗教部長（横浜校地）

野田 美由紀

コロサイの信徒への手紙 四章五〜六節

時をよく用い、外部の人に対して賢くふるまいなさい。いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば、一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう。

前期の授業もひと月余りが過ぎました。皆さんは、忙しくも充実したキャンパスライフを過ごしているのではないのでしょうか。でも、中には、もう一か月過ぎてしまった、と焦りの気持ちを抱いている人がいるかもしれませんし、まだ一か月か、連休も過ぎて、夏休みはまだまだ先が長い、と思っている人もいます。

私たちが過ごしている時間は、客観的には誰にとつても同じ速さで進んでいます。自分にとつての時間の長さとは人それぞれに違います。だいたい前に、「人生一八歳真ん中説」というような言葉を聞いたことがあります。大学一年生にとつてはこれまで生きてきた時間と、これから先何十年続くかわからない残りの人生が同じくらいの長さ、ということになります。もちろん、それは事実とは違うでしょう。でも、実感として何となくわかる、という人も

いるのではないでしょうか。

言うまでもなく、これは時間の感じ方の話です。子どもの頃は、楽しく遊んでいればその時間はあっという間に感じることもあったでしょうが、総じて言うと、一日や一年を今よりもっと長く感じていたのではないのでしょうか。でも、年齢が進むにつれて、時間の過ぎ去るのを早く感じるようになった、そういう人が多いと思います。

その感覚は、その後歳を重ねるほどにさらにスピードアップします。歳を取るほどに、「光陰矢の如し」とはそのとおりだと実感するのです。もちろん時の過ぎるのが早いと感じるのは、それなりに充実した時間の過ごし方をしている、あるいはやるべきことに追われ、やりたいことも多くて、忙しく過ごしているからだろうと思いますが。先ほど読んだ聖書の箇所で、今日は特に「時をよく用いて」という言葉に焦点を当てて考えてみます。

今は、人生二〇〇年時代とも言われます。正直そこまで長くなくてもよいと思ったりしますが、もしそうだとすると、一〇代、二〇代の皆さんは言うまでもなく、私もまだかなりの時を地上で過ごすことになるかもしれません。いずれにせよ、同じ何十年かの人生を過ごすなら、その時間を無為に過ごして無駄遣いするのではなく、有意義に使いたいと思うのではないのでしょうか。

別に、最近よく言われるタイムパフォーマンス、タイパをよくしようという話ではありません。皆さんもタイパを気にして映画を早送りで観るといったことをしているかもしれません。それは個人の自由ですが、古い考えの大人からすると、逆にもつたいない気もします。

では「時をよく用いる」とはどういうことでしょうか。聖書ではこの勧めが「外部の人に対して賢くふるまいなさい」という言葉と結びつき、さらに「塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」という言葉が続いています。そ

う考えると、単に時間を有効に使うようにというアドヴァイスではないでしょう。「賢くふるまう」のも「快い言葉で語る」のも、自分一人のことではなく、他の人との関係の話です。「時をよく用いる」仕方や目的はさまざまあるかもしれませんが、ここではやはり他者との関係において、という点が重要ではないかと思うのです。

私たちは好むと好まざるとにかかわらず、生まれた瞬間から時間を使つて生きています。今は時間を使いたくないと思つても、何をしていても、また何もしなくても、私たちに与えられた有限な時間は過ぎていきます。だとすれば、どのように時間を使うのが「時をよく用いる」ことになるのでしょうか。

誰にも当てはまる唯一絶対の答え、正解はないでしょう。でも、聖書が示しているひとつの答えは、愛のために使うことではないかと思うのです。

いつだったか、前任校の生徒に、「愛とは何だと思えますか」という質問をされたことがあります。皆さんだったらどう答えますか。私がすぐに答えられずにいろいろ考えていると、彼女は「私は、相手のために時間を使うことだと思えます」と言いました。その時はそれで話が終わりましたが、その後いろいろな出来事を経験し、考える中で、本当にそうかもしれない、と今は思います。

これは恋愛の対象に対してだけではありません。家族、友人、場合によっては行きずりの人、または顔を見たこともない人のために、時間を使うことが私たちにもあります。身近な例でいえば、相手が喜ぶプレゼントを考えて探す時、または問題を抱えて悩んでいる友人の話の聞いている時もそうでしょう。

時には、他にやらなければならないことがあつてゆとりがないこともあるでしょう。タイパを考えたならこんなこととしていられない、と思うこともあるかもしれません。でも、人のために時間を使うのは、広い意味で愛のために

時を用いるということ、それは私たちにもできる小さな奉仕の業、愛の業だと言えるのではないだろうか。

使った時間、過ぎた時は二度と戻らないし、取り返すことはできません。だからこそ、どうしたら今の時をよく用いることができるか、それを見分けることが大切だと思うのです。

「マタイ受難曲」

大学人間科学部人間科学科教授

小坂和子

コヘレトの言葉 三章一節

何事なにじにも時ときがあり

天てんの下したの出来事できごとにはすべて定めさだめられた時ときがある。

今年のイースターは四月二〇日でした。

クリスマスチャンホームに育ったので、イースターは身近でした。でも本格的なイースター・イベントというと、幼稚園で出会った宣教師ご家族の思い出につながります。未っ子の少女と同級生でした。年少クラスの私は、二月生まれのため、みんなのようにうまく「ことば」がしゃべれず、彼女は「日本語」がしゃべれず、いつも二人で手をつないで園庭の隅にいました。でも私には「彼女から本場のイースターを教えてもらった」という確かな記憶があります。彼女が巻き毛をゆらしながら、身振り手振りでお話してくれているシーンがすぐに目に浮かびます。声も、響きも、彼女が描いたイースターエッグの絵も、サンドイッチもオレンジジュースも、カラフルなランチボツ

クスも、そして二人でくすくす笑っていた感じも、とてもリアルに再生できるのです。けれども、どうやって話していたのか、どうやって理解したのか……。大人が通訳してくれたのだろうとは思いますが、二人きりの時間もたぐさんあって、本当のところは、よくわかりません。

ところで、さかのぼってレントといえば、「最後の晚餐」の場面が浮かんできます。「一同は賛美の歌をうたつてから、オリブ山へ出かけた」（マタイによる福音書二六章三〇節）。伴奏楽器もなく、ユニゾンの静かな旋律だったのでしょうか。その場に行ることができたとしても、歌詞の意味はわからないでしょう。複雑な想いを抱えた弟子たちの声と、そしてご自身のゆく道をおわかりであるイエスの声。あたりの音とまじりあい、鳴り響き、最後には静寂に至るその音楽は、「受難」そのものを黙示していただろうと想像します。

最近、バッハの「マタイ受難曲」に凝って、CDのコレクションをしています。マタイによる福音書二六・二七章をテキストにした、イエスの死までの物語が描かれています。演奏には三時間程度を要する大曲です。大学時代には音楽仲間の友人にいくら勧められても、第一部の途中の子どもコーラスがなくなるあたりで、気が散り始め、挫折していたものです。学外出張の折に、YouTubeで第二部のはじめの“*Erbarne dich, mein Gott*（憐れみたまえ、わが神よ）”のアルト・アリア（*Delphine Galou*）を聞く機会がありました。スマホでしたが、深々と沈潜していくような響きに、学会でのディスカッションを消化しきれず、思い惑っていたところの中が静まっていくようでした。“*Erbarne dich*”と*ゼリチン*語の“*Kirie eleison*”のドイツ語訳です。イエスの言葉通りに、三度「知らない」と言ってしまったペトロの涙と慟哭に、バッハは祈りの道筋をつけ、見事な音楽世界を創造しました。

「マタイ受難曲」の中でも、余白の多い演奏が好きになりました。音楽が細く細く減衰して、ついに無音になる瞬間のすごさが心にしみるようになってきた気がします。年をとってよいこと、ってあまりない気がしていたのですが、こんなふうにはつとすることがあると、これが年齢を重ねる喜びなのかなと思うことがあります。

その場で判断し、何かを見出し、見失う。瞬間の「私」の基準に過ぎないと思っけていても、見えざる堆積と再構築が繰り返されて、明日が創られる……バッハの曲構想の壮大さと、神に見守られていることの意味深さに圧倒されます。

現在、私は大学と大学院で臨床心理学領域の講義や、公認心理師・臨床心理士のための研修・実習を担当しています。心理支援の現場でも仕事をしています。教育・研究と、実践を行うという仕事のスタイルは、大学時代の指導教官の姿に教わりました。大きな黒い鞆をもって、大学の研究室の廊下を歩いておられる先生は、いつも速足でした。一方、ご指導をうけるために相談にうかがうと、じつと動かず、深く耳を傾けてくださいました。あれこれと助言されることも、また判断を下すことも、結論を示すこともありませんでした。しかし、ゆつくりとですが、自分の中で、雑多な思いつきがまとまっていき、おぼろげな形になっていくのが感じられました。一度、「先生ご自身が迷ったり、困ったときにはどうするのですか、それとも、もうそういうことはないのですか」、と仲間と共にお尋ねしたことがあります。先生は苦笑いして、いくつか例を挙げた後、「音楽があるから」とおっしゃいました。その意味を何度も何度も味わうことが増えました。先生の笑顔と、きわめて内省的な声の響きが浮かび上がってきます。

パイプオルガンの奏樂と讚美がチャペルの空間で重なり合い、消えていきます。音楽の輪郭が響きとして残るとき。最終音の後に静寂が鋭く切り込んでくるとき。タッチやビジョンの感覚が支配するとき。誰もいないチャペルの席に座っていると、そういった響きの最後の瞬間がよみがえってきます。それは、次の音が生まれるのをじっと待っている瞬間でもあると思うのです。そんなことを講義で触れたら、ある学生さんが授業後にやってきて「それは音の卵、というんじゃないかと思えます」と教えてくださいました。

何かを創造し続けていくことの大変さに目を奪われがちな日々ですが、「見えざるもの」を見ようとするところ、「聴こえざるもの」を聴くことのできることを大切にしたいと思うのです。

(本稿は二〇二五年五月一二日の奨励と六月五日の週報短文をもとに起草したものです)

種は蒔かれています

大学国際社会学部国際コミュニケーション学科教授

平 体 由 美

マルコによる福音書 四章二六～二九節

また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の 때가来たからである。」

聖書には種まきのたとえ話がたくさん出てきます。今回お読みいただいた箇所直前にも、道端に蒔かれた種や、岩地に蒔かれた種、良い土地に蒔かれた種の話があります。この場合の「種」とは御言葉、つまり聖書の言葉や神の言葉を意味します。イエス様は、その言葉の種がすくすく育つか、あるいは芽を出さないで終わるかは、蒔かれた土地によると言っておられます。言葉を聞く私たちの側がどうか、私たちがどう受け取るかによる、と理解できます。同じ話は他の福音書（マタイによる福音書一三章）にも書かれています。

しかし、今日お読みした箇所は、マルコによる福音書にしか記述がありません。二六節「夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」。どうしてそうなるのか、知っているのは神様だけです。そこに働いているのは神の力です。本日の讚美歌五七五番「球根の中には」で歌ったように、その日、その時をただ神が知る、というのは象徴的です。神にできないことはありません。岩地の上でも、いばらの中でも、種が蒔かれてそこにあるならば、それを育てるのは神の力と意思です。どうしてそうなるのか、どのような作用でそれが起きるのか、残念ながら人間にはわかりません。ただ、人間はそれを認めるか認めないか、そしてポジティブに考えるか背を向けるかを選ぶだけです。

大学の礼拝は、キリスト教概論の授業以上に種がまかれている時です。ご参集の多くの学生さんは、授業で必要だからここに来ているだけで、必要がなかったら来ない、と考えているかもしれません。そういう学生は多いので、ご安心ください。ただ、私の元ゼミ生の話だけは皆様にお伝えしたいと思います。

数年前に卒業した元ゼミ生のAさんは、学生時代、必修だからキリスト教概論は取りましたし、単位修得に必要なので礼拝に参加しましたが、実は宗教的なもの全般に批判的でした。「憲法に信教の自由があるのに礼拝出席を強要するなんておかしい」と常々語り、クリスマス礼拝や卒業礼拝などにも出ませんでした。彼女が自発的にチャペルに来たのは、卒業式でガウンを着て記念写真を撮った時だけです。学生時代、Aさんに蒔かれた神の言葉はまったく芽を出しませんでした。その彼女と今年の三月に「NHK」でやりとりしました。あこがれて就職したはずの会社が体質にあわず、心を壊して辞めた、いまは親元を離れて別の仕事をしている、とのことでした。そしてAさんは「先生ってクリスチャンでしたよね。教会に行ってみたいと思うんですが、オススメありますか」と聞いてき

たのです。あの彼女が、と私は驚きました。種は蒔かれており、それが今年になって芽を出したのです。それがどのように育つか、あるいは育たないかは私の知ることはありません。しかし、少なくとも神様はどのように取り計らったのです。

どうしてそうなるのかわからなくても、なるものはなりません。学者がそれを言うのは不適切かもしれません。しかし、まずはそういうことが起こるといふのを認めなければなりません。

皆さんは選ばれてこの大学に来ました。選んだのは大学ではありません。神様です。皆さんはすでに選ばれているのです。そして種が蒔かれています。今日、必修授業のため仕方なく礼拝に来た人が、いつか、それが卒業後であつても、望んで神様を求める日が来るかもしれませぬ。子どもとは違い、大人の心の種は殻が固いです。ですから今すぐに根を伸ばし芽を出すことはないかもしれませぬ。しかし、神様は何らかの形で働きかけを続けておられると思います。

迷いの中でも共に希望を築こう——神の国のビジョンとエレミヤの光

大学国際社会学部国際社会学科准教授

堀川 敏 寛

エレミヤ書 二九章一〇～一四節

主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求め、わたしに出会うであろう、と主は言われる。わたしは捕囚の民を帰らせる。わたしはあなたたちをあらゆる国々の間に、またあらゆる地域に追いやったが、そこから呼び集め、かつてそこから捕囚として追いつ出した元の場所へ連れ戻す、と主は言われる。

ルカによる福音書 一七章二〇～二二節

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。「ここにある」「あそこにある」と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの

間あいだにあるのだ。」

「この社会に、希望はあるのか」「自分が生きる意味は、どこにあるのか」。そんな問いを抱えたことは、誰しも一度はあるのではないだろうか。将来が見えないという不安、何者かにならなければならないという焦り、人との距離感に悩む日常、そして社会の不正や分断に触れて心が沈む時。自律的な選択と責任が求められる大学生活では、自由であるがゆえに、こうした迷いと不安に直面しやすい時期でもあります。

聖書は、こうした「先が見えない時」に生きる者に、どのような言葉を語っているのでしょうか。今日一緒に読みたいのは、二つの聖書の言葉です。ひとつはイエスの言葉「実に、神の国はあなたがたの間にある」（ルカによる福音書一七章二一節）、もうひとつは、バビロン捕囚という絶望のただ中であつた人々に語られた神の言葉「わたしはあなたがたのために立てた計画を知っている。それは平安を与え、災いを与えない計画であり、将来と希望を与えるものである」（エレミヤ書二九章一一節・抄訳）です。

「神の国」と聞くと、死後に行く場所や宗教的な理想郷を思い浮かべる方も多いかもかもしれません。けれども、イエスが語った「神の国」は、単に来世のことではありません。むしろ今、私たちがここで始めていくべき希望のかけ橋です。不正が正され弱い立場の人の声が届く社会、愛と赦しが対立や報復を超える現実、そのような「神の国」は、どこか遠くにあるのではなく、私たちの「ただ中」に、つまり人と人との関係のなかに芽生えていくのです。

エレミヤの時代、民は捕囚という絶望のただ中にありました。生活基盤を失い、国を追われ、未来を見失ってい

たのです。それは現代に生きる私たちが感じる「先の見えない時間」と似ています。目標が定まらず、努力が報われる保証もない中で、「このままでよいのか」と思い悩む。けれど神は、そのような人々に「希望のある未来」を語られたのです。それは単なる慰めではなく、神が私たちに対して持つておられるご意思——つまり、災いではなく平安をもたらすという意思の表明なのです。

聖書の最初のページに戻ってみましょう。神が天地を創造されたとき、最初に語られたのは「光あれ」という言葉でした。けれどそのとき、まだ太陽も月も星も存在していませんでした。では、そこに生まれた「光」とは何だったのでしょうか。それは自然の光ではなく、「希望の光」だったと理解することができます。神の創造の営みは、混沌の中にまず希望を示すことから始まりました。そしてこの「希望の光」は、私たち一人ひとりの人生にも注がれているのです。

とはいえ、その希望はただ空から降ってくるものではありません。エレミヤ書は「あなたがたがわたしを呼び求め、全身全霊でわたしを捜し求めるならば、わたしはあなたに会いだされる」と記します。このような心の深みに向かう行為が祈りなのです。スマホを置いて静かに自分自身と向き合う時間を持つとき、自分が何を願い、何を信じて生きているのかを問います——そのような姿勢が、希望の光に心を開く道となるのです。

イエスは、「天の国はからし種に似ている」（マタイによる福音書一三章三一節）とも語りました。からし種はとても小さな種ですが、やがて大きな木となり、鳥がその枝に巣をつくるようになります。すなわち、あなたが今日誰かに示すやさしさ、自分の弱さを正直に受け入れる姿勢、対話をあきらめずに関係を築こうとする努力——それらすべての歩みが「神の国」という大きな希望の光へと育っていくのです。

私たちは皆、ある種の「見えない未来」を信じて生きています。そのなかで希望を築いて歩んでいくための中心となる御言葉が、「敬神」と「奉仕」です。これは東洋英和女学院のスクールモットーでありますが、同時に人間の存在の根幹に関わる二つの姿勢でもあります。「敬神」とは、自分を超えた存在の前に謙虚に立つこと。つまり、自分の限界を知りつつも、なおも希望を信じる姿勢です。そして「奉仕」とは、信仰者だけに与えられた善行ではありません。むしろそれは、声なき声に耳を傾け、傷ついた人に寄り添い、小さな行いを通して関係を築いていく、そのような日々の小さな実践を意味します。エレミヤ書が語る「神を捜し求めよ」という勧めもまた、このような祈りと実践に結びついているでしょう。

すなわち、自分の深層と向き合い、何を願い、何に依拠しているのかを問い直す中で、私たちは神と出会い、そこに希望の光を見出していくのです。こうした希望を手放さずにいる確信こそ、「神の国」というビジョンの核心です。そしてその神の国は、あなたのただ中に、そしてあなたと誰かとの間に、すでに芽生えているはずです。だからこそ、あなたにもできるのです。迷いや不安の中であっても、ともに希望を築いていくことが。

(本稿は二〇二五年五月一九日と六月一三日の奨励をもとに起草したものです)

用いてくださる神様を信じて

中学部教頭 柿野 滋子

フィリピの信徒への手紙 二章二五―三〇節

ところでわたしは、エパフロディトをそちらに帰さねばならないと考えています。彼はわたしの兄弟、協力者、戦友であり、また、あなたがたの使者として、わたしの窮乏のとき奉仕者となってくれましたが、しきりにあなたがた一同と会いたがっており、自分の病気があなたがたに知られたことを心苦しく思っているからです。実際、彼はひん死の重病にかかりましたが、神は彼を憐れんでくださいました。彼だけでなく、わたしをも憐れんで、悲しみを重ねずに済むようにしてくださいました。そういうわけで、大急ぎで彼を送ります。あなたがたは再会を喜ぶでしょうし、わたしも悲しみが和らぐでしょう。だから、主に結び合っている者として大いに歓迎してください。そして、彼のような人々を敬いなさい。わたしに奉仕することであるあなたがたのできない分を果たそうと、彼はキリストの業に命をかけ、死ぬほどの目に遭ったのです。

英和を卒業して、大学生になった時、私は混声合唱のサークルに入りました。単に歌うことが好きだっただけで、

中高部時代に合唱部だったわけでもないし、特別に音楽の素養があったわけでもありません。それこそ、英和での音楽の授業が楽しかったから、くらいの動機で合唱団に入ったわけです。でもこれが私の人生にはありがちなことなのですが、皆がまだ新しい環境に右往左往している間に、能力も経験もないのに、気が付いたらまとめ役になっていた、というパターン。新入生だけのコンサートに向けてのアルトのパートリーダーに、なぜか就任していました。例えば中学部の合唱コンクールが初めて開催された年、私は中二だったのですが、わけもわからず指揮者になっていました。クラスは何一つ賞が取れませんでした。生徒会評議会から初めて楓祭実行委員会に委員を派遣した年、楓実未経験者ばかりの評議会の一員だった高二の私は、気が付いたら楓実の副委員長になっていました。会計のお金が合わず、泣きそうになりながら夕方遅くまで、先生とお金を数えていたのを思い出します。いずれももつと適任者が周りにたくさんいる中で、苦しい戦いでした。そして大学生になってふわふわ、うきうきしていた私は、またもうつかり負いきれない試練をしょい込むことになりました。アルトの新生徒だけでも一〇人以上いる大所帯の合唱団でしたが、ふたを開けてみれば、私なんかよりずっと歌が上手い人がいっぱい。パート練習でも、ちゃんと歌えているのか良くわからない私には、四声で合わせた時にどうなっているかなんて、余計に聴き分ける耳など持っていないません。コンサートまでの二ヶ月間、ひたすら自信の無さに苦しみ続け、また、役に立たない自分を同級生の皆はいつたいていどういふふうに見ているのだろうかということばかり気にしながら、すごしていたのを覚えています。

さて、今日の聖書の箇所には、そんな私が激しく共感する人物が登場します。彼の名前はエパフロデイト。ギリシャ語で「魅力的な」という意味の名前を持つ彼は、聖書ではこのフィリピの信徒への手紙にしか登場しない人物ですが、パウロに「わたしの兄弟、協力者、戦友であり、また、あなたがたの使者として、わたしの窮乏のとき奉

仕者」とまで、賞賛されています。パウロにとでも愛され、信頼されていたことがわかります。エパフロデイトは、かつてパウロが伝道し、建てたフィリピの教会の代表として、遠く離れたエフェソの牢獄に監禁されていたパウロのもとに多くの物資やお金を持って来た人物です。当時の牢獄は、食べるものも日用品も備えられておらず、外部からの支援者が居なければ、囚人は飢えて獄死するのは当たり前前の環境だったようです。フィリピの教会の信徒たちは、キリスト教伝道が原因で捕らえられたパウロの世話を任せようと、エパフロデイトをパウロのもとに送り出したのです。もちろんエパフロデイトも固い決意のもと、牢獄でのパウロの生活を守ろうとします。しかし到着して間もなく、エパフロデイト自らが病を得て倒れてしまい、一度は命の危機にも直面します。神が救ってくださいだったので一命をとりとめますが、身体も心も弱ってしまい、本当は自分のことでいっぱいはいっぱいで、パウロの世話をするどころではなかったのではないのでしょうか。早く故郷のフィリピに帰って休みたい、というのが本音だったでしょう。でも簡単に帰るわけにはいきません。フィリピの教会の多くの人たちは自分に期待している。パウロを命がけで守ることこそが、自分の使命で、それができる人物として、自分は選ばれ、物資やお金を託されて、今エフェソにいるのだと。彼は何とか体調を整えつつ、パウロの世話を続けました。どこからか、エパフロデイトが重病になったという情報がフィリピに伝わったらしいことも、彼がフィリピに帰りづらくなった大きな原因です。きっとフィリピの教会の人たちは役立たずの自分にあきれ、失望しているにちがいない。せっかく選んでやったのに、とんだ期待外れだったと思われるにちがいない、と思ってしまうたのでしょね。そこでパウロが、その彼の気持ちを思いやつて、このようにフィリピの信徒たちに手紙を書いたわけです。エパフロデイトをこれからフィリピに帰すけれども、彼を「主に結ばれている者として大いに歓迎してください。そして、彼のような人々を敬いなさい。わたしに奉仕

することであたがたのできない分を果たそうと、彼はキリストの業に命をかけ、死ぬほどの目に遭ったのです」と。パウロにとつては、自分を助けるために、フィリピからはるばるやつて来たエパフロデイトは、重病になろうと、役に立たなからうと、その存在自体が尊いのです。神に用いられた彼自身に価値があると考えているのです。こうした身体も、もしかしたらメンタルも弱い、エパフロデイトのような、いわゆる普通の人が、神の御用に用いられることこそ、尊く大切なことだと思ひ、その価値をフィリピの人たちにもパウロは伝えようとしているのだと思ひます。

昨年四月に天に召された詩人で画家の星野富弘さんをご存知でしょうか。星野さんは、中学校の体育の先生として器械体操の模範演技中に、誤つて頭部から落下し、頸髓を損傷し、首から下の身体が麻痺してしまいました。その後家族の献身的な支えのもと、口に筆をくわえて、主に花の絵を描き、それに詩を添える作画活動を始めます。同じキリスト教の信仰を持つ奥様と二人三脚で生涯作品を生み出し続け、高く評価されてきた方です。その星野さんがドキュメンタリー番組で、こんなことをおっしゃっていました。「花つてやつぱり秋になると枯れてきますよね。でも綺麗なんですよ。虫に食われちゃったり、全部花びらが揃つてないものもあつたり。それの方が何か面白い」。私たちは、自分の物差しで、価値がある、価値がないと考へてしまいがちです。それは自分自身に対しても、周りの人に対しても、そのような思ひをもつて、苦しんだり、比べたり、裁いたりしてしまいます。美しく整つたものだけに価値があるわけではない。役に立つ、強くて優秀なものだけが良いのではない。神の目にはお造りになつたすべてが、懸命に生きるその姿が、大切に尊いものと見えているのだと私たちは信じていたいと思ひます。どんな存在も神が愛し、大切に思つてくださつていて、ことを忘れずに、そのような自分に自信をもつて、精いっぱい自分にできることに励みながら、また同じように神に愛されている隣人を敬いつつ、一日一日を過ごしていきたいと思ひます。

皆さんは今日どの斧を選びますか？

中高部聖書科教諭
朴 洙美

フィリピの信徒への手紙 三章一七～二二節

兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

昔キコリさんが、川のそばで木を切っていました。ところが手が滑って、持っていた斧を川に落としてしまいました。キコリさんは困ってしまい、シクシク泣きました。斧がないと、仕事ができないからです。すると川の中か

ら不思議なおジイサンが現れ、ぴかぴかに光る金のオノを見せました。「お前が落としたのは、この斧か?」「違います。わたしが落としたのは、そんなに立派な斧ではありません」。するとおジイサンは、次に銀の斧を出しました。「では、この斧かい?」「いいえ。そんなにきれいな斧でもありません」「では、この斧か?」おジイサンが三番目に見せたのは、使い古した汚い鉄の斧でした。「そうです。それが私の斧です。拾ってくださいありがとうございます」「そうですか、お前は正直な人だな」とおジイサンは感心して、金の斧も銀の斧もキコリさんにあげました。一方、このキコリさんをうらやましがり、わざと自分の鉄の斧を川に落とした者がいましたが、彼は金銀の斧どころか、自分の斧まで失ってしまいました。

もし金の斧、銀の斧のおジイサンが皆さんの前に現れ、金の斧、銀の斧、そして鉄の斧を見せ、「どれがあなたの斧であるか?」と聞かれたとしましょう。進路に悩み、将来の不安を抱えている高二、高三の皆さんにとって、金の斧は世界で誰もが認める一流大学の合格通知書ではないでしょうか。それを受け取ると明日から名門大学生の道へと導いてくれます。銀の斧は、明日から一流企業の社員、もしくは医者、弁護士など、誰もが認める職業へと導いてくれます。そして、鉄の斧は今のままです。今このまま英和生として学校生活を続けることです。

皆さんは、どれを選びますか?

または、中間テストを終えた皆さんにとって金の斧は全教科、一〇〇点など満点のテスト返し、銀の斧は明日から夏休み、鉄の斧は今のままです。(私は銀の斧を選びたくありません。)

皆さんは、どれを選びますか?

どうして金の斧、銀の斧のおジイサンは真つ先にキコリさんに鉄の斧を渡せばいいのに、あなたの斧は金の斧か、

銀の斧かと聞いたり、時間をかけてキコリさんに質問したのでしょうか。「どれがあなたのものなのか？」と問いかけられた時、キコリさんに迷いはなかったのでしょうか。

皆さんにとって金の斧、銀の斧は、一流大学や、名誉のある職業など、人から認められる立場、そして努力しないでそれらを手に入れようとすることなどこの世の価値観を象徴するものと考えられます。金の斧、銀の斧は自分の目標や目指す生き方でもなく、この世の流行り、時代の流れ、他人の価値観によって決められた物、努力しない、楽しんで手に入れたという思いが反映されたものです。

今日の聖書のフィリピの教会の人たちは金の斧、銀の斧を追い求め、キリストの十字架と復活による赦しと救いの恵みを捨てようとする人たちがいることを聞いて、パウロは泣きながら、止めようとしているのです。フィリピは元々金と銀が取れる豊かな町でした。ローマ帝国の植民地となり、税金をたくさん払ったり、商売などに制限がかかりました。しかしローマの市民権があるとこのような不自由はなく、ローマ法の保護に入るなどさまざまな特権も手に入れられます。ローマの市民権は植民地の人も取得できます。但し条件が厳しいのです。家族の誰かがローマ兵士として一六年以上勤めたり戦死するなどローマに貢献した人に与えられました。または莫大なお金を払って市民権を買う必要がありました。この時代のフィリピにおいて成功を象徴するものはローマ市民権の取得でした。まるでそれが人生の目的かのようになっていたのです。その考えが教会にも入ってしまったのです。フィリピの教会の人たちは金・銀の斧を手に入れようと、大事な自分の鉄の斧をほったらかしにしていたのです。

さて、次の人物たちが選んだものはどれでしょうか。

パウロ ユダヤ人でありながら、ローマの市民権をもっていますが、彼は今ローマの牢屋に入れられました。町

の秩序を乱したということで通報されたのです。パウロは霊に取り付かれ苦しんでいた女性を自由にしましたが、その女性を使って占いをしていた雇い人は、儲けができなくなつて憤慨してパウロを町の秩序を乱した者として通報し、ローマ兵士は調べることなく、パウロたちを牢屋に入れました。本当は市民権があり、ローマ法に保護されているので、すぐにパウロを牢屋に入れることはできないのです。しかしパウロは黙つて仲間と共に牢屋に入りました。映画『テルマエ・ロマエ』のようにローマは贅沢なお風呂が有名です。そのお風呂にもただで入る特権などがあつた生活ができました。しかし彼は「私はローマの市民権を持っている人でも、ユダヤ人のラビでもなく、私パウロは神の国に生きるものです」と鉄の斧を選びました。

カートメル先生 素敵な方と恋愛したり青春を満喫しながら、メイプルシロップ入りの紅茶とケーキを食べながら、優雅に暮らすことも、カナダで学校の先生をすることもできたはずですが、けれどもカートメル先生は神の国に生きる者として神の国を日本の女子たちに伝える道を選びました。鉄の斧です。

イエス様 フイリピ二章六節「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえつて自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだつて、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」。イエス様も鉄の斧を選びました。

神様が一人ひとりをお選びになつてこの東洋英和に呼んでくださり、敬神奉仕の学びの恵みを与えてくださったのです。この世の価値観に流されることなく神様から与えられた貴重な命が活かされる一人の英和生として、キリストの十字架の赦しと復活に希望をもつ神の国に生きる者になりますよう祈りましょう。

金の斧、銀の斧、鉄の斧、皆さんは今日どの斧を選びますか？

七夕とキリスト教

中高部聖書科教諭 上野峻一

使徒言行録 一七章一六〜二三節

パウロはアテネで二人を待つている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。それで、会堂ではユダヤ人や神をあがめる人々と論じ、また、広場では居合わせた人々と毎日論じ合っていた。また、エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論したが、その中には、「このおしやべりは、何を言いたいのだろうか」と言う者もいれば、「彼は外国の神々の宣伝をする者らしい」と言う者もいた。パウロが、イエスと復活について福音を告げ知らせていたからである。そこで、彼らはパウロをアレオパゴスに連れて行き、こう言った。「あなたが説いているこの新しい教えがどんなものか、知らせてもらえないか。奇妙なことをわたしたちに聞かせているが、それがどんな意味なのか知りたいのだ。」すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである。パウロは、アレオパゴスの真ん中に立つて言った。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、「知られざる神に」と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに

拝おがんでいるもの、それをわたしはお知しらせしましょう。」

今日は、七月七日です。中高部の二階のロビーにも短冊をかける笹があります。けれども、東洋英和はキリスト教学校です。この笹と短冊、大丈夫ですか。皆さんはどう思いますか。何年か前に聞いた話です。昔おられた聖書科の先生は、生徒が教室に飾った七夕の笹と短冊を見て、キリスト教学校での七夕はおかしいと片付けさせたようです。ところが、今ロビーに笹や短冊があるのにも関わらず、誰からも何も聞きません。東洋英和のキリスト教学校としての質は、昔よりも下がってしまったのでしょうか。(注)

先日、娘とスーパーに買い物に行きました。そこに笹と短冊があつて誰でも自由に願いを書いて、短冊をかけるようになっていました。幼い頃から教会付属の保育園に通っていて、今年からはキリスト教学校に入学した娘です。彼女は言いました。「パパ、あれ何?」

パパン、問題です。「パパ、あれ何?」という小学一年生の娘に、英和の聖書の先生であり、牧師である私は一体どのように答えたでしょうか。四択問題です。①「あれは、こっちゃんには関係ないよ」と自分たちとは無関係であることを伝えた。②「まあ、何も考えずにお願いを書けばいいよ」と一緒に短冊にお願いを書いた。③「あれはね、七夕といつて星に願いを書くものだよ」と七夕についてざっくり説明した。④「あれはね、悪魔の仕業で、あれに願いを書くと魂を奪われるよ」と関わらないように怖がらせた。さあ、私の対応は一体どれでしょうか。よく考えてください。正解は、ジャカジャカ、ジャン。③の「七夕についてざっくり説明した」でした。

すると、娘は言いました。「何で星に願うの？ 星って神さまなの？」さすが牧師の娘です。「星は神さまじゃないよ。神さまが造ったものだよ。こっちゃんも何かお願い書いてみる？」「うーん、いつもお祈りしているからいいや」。ちよつとつまらなかつたので、もう少し突っ込んでみました。「もしお願い書くとしたら、どんなこと書くの？」「みんなが楽しくいられるようにな」。日々楽しさを追求するところは、さすが我が娘です。ちなみに「パパがお願いを書くとしたら、何を書くと思う？」とも聞いてみました。「伝道がうまくいくようにでしょ」。もし今年から開拓伝道を始めて日吉で教会を始めていたら、地域への宣伝も兼ねて五〇枚くらい短冊を書くつもりでした。

伝道者パウロは、ありとあらゆる「神様」と呼ばれるものが乱立するアテネで、天地を造られた神について語りました。パウロは偶像を真つ向から否定して、叩き潰したり、脅したりするのではなく、「知られざる神」とさえ刻まれている像に拜んでいる神とは何かを、ちゃんと伝えるのです。

人は、何かを信じて生きていく生きものです。何も信じずに生きることはできません。信じるとは、目に見えないものを信じています。友達や先生、家族を信じるといつても、それは、そこに「その人がいる」ことを信じているわけではありません。信じている友達や先生、家族が「自分を大切にしてくれているか、嘘をついたり傷つけないか」とつまり、自分を裏切ることなくて信頼し合える関係があるということです。

そういう意味では、見えるものというのは「その先にある、その奥にある見えないものを表すためにある」とも言えます。例えば、好きな人がいたとします。その想いがある。これは目に見えません。それが見えるものに変えていかなければ、想いは伝わりません。もちろん、必ずしも伝える必要もないと思います。しかし想いが大きくな

ればなるほど、その想いは抑えられずに溢れてきます。

七夕の星も、そこにある物語よりも、そこにある想いとか、願いとかが大事なのです。心の願いを外に出すのも大事なことの一つです。人は、人間の力では、どうにもできない時、そこに大いなる存在を求めます。七月七日、「七」は完全数です。神様が七日で世界を造られたことに根拠があります。私たちに、天地を創造して星さえも造られた主なる神様がおられます。

その主なる神様がなさった最大の出来事が、主イエス・キリストの復活です。キリスト教は、聖書の中心は、実はごくシンプルです。伝えることは、神の愛です。その目に見えないものが、見えるものとして、すべてイエス様に表わされました。この方を信じるこそが神の愛を生きることです。そこさえしっかりしていれば、大丈夫です。クリスマスも、イースターも、上手にその土地の宗教や文化を取り込んできました。七夕もまた、星の先にある天地の造り主なる神へと願いを表す日にすればいいのです。

そういう意味では、東洋英和はキリスト教学校の最先端をいつているのかもしれませんが、もう新しい一週間が始まっています。今週をしっかりと乗り切れば、すぐそこまで夏休みが来ています。今日も何があっても、主が共にいてくださることを忘れず、神の愛に生きる一日の歩みを始めたいと思います。お祈りをいたしましょう。

(注) 中高部のロビーの短冊用紙には、すべて「このお祈りをイエス様のお名前によってお捧げします アーメン」とあります。

御言葉に支えられて

小学部教諭 町田 協子

ペトロの手紙二 一章二節

なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉

を語ったものだからです。

(二〇二五年二月の全校礼拝説教)

皆さん、世界で一番売れている本は何だか知っていますか。そうです、世界で一番売れている本は、聖書です。聖書は、毎年、何十年間も何百年間もの間、世界で一番売れている本です。海外のホテルに泊まると、お部屋のベッドの横に、聖書が置いてあるホテルがとても多いです。それだけ世界中の人が聖書を読んでいるということです。

聖書の御言葉に支えられた、また聖書の御言葉を支えに生きている、という人のお話をよく聞きます。先日も新聞を読んでいたら、北川景子さんという俳優の方のお話が載っていました。北川さんは今から三〇年前、神戸に住

んでいたときに阪神大震災にあい、通っていた小学校が避難所になったために、おばあさまが住んでいらした四国の香川県で避難生活を送られました。なぜ自分がつらい目にあうのか、どうしてたくさんの方が亡くならなければならなかったのか、不安や絶望の気持ちにおそわれていたそうです。その後、大阪女学院というキリスト教の中学校に入学して聖書に出会い、不安や絶望感が薄れていって、聖書の御言葉に支えられた、という内容の記事でした。

では、なぜ北川さんをはじめ、たくさんの方々の世界中の人に聖書は読まれているのでしょうか。それは、聖書が「神さまのことば」であるからです。聖書を通して、私たちは神さまの言葉を聞くことができます。もちろん、神さまご自身が鉛筆やペンを持って書かれたわけではありません。今日の聖書の箇所はペトロさんが書かれたものです。ペンをとって書いたのは人間であるけれど、それはその人が人間の勝手な考えを書いたものではありません。そこには神さまのお働きがあつて、神さまのお働きによつて書かれたものである、ということなのです。

特にペトロさんは、実際に自分が見たことを書いています。ペトロさんが何を見たかというところ、その出来事は、マタイによる福音書では一七章、マルコによる福音書とルカによる福音書では九章に書かれています。イエスさまが、ペトロさんとヤコブさんとヨハネさんの三人のお弟子さんを連れて、高い山に登られたことがありました。するとその山の上で、イエスさまのお姿が変わり、お顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなりました。そしてそこに、とつくの昔に亡くなっているはずの旧約聖書の預言者であるモーセとエリヤが現れ、イエスさまとお話をはじめた……そういう不思議な出来事を、ペトロさんとヨハネさんとヤコブさんの三人のお弟子さんたちは実際に見たのです。

「聖書は人間が書いた」という人がいるけれど、私は実際に見たことを書いているのですよ、旧約聖書で預言さ

れたことがその通りになった、だから私たちは神さまのお働きによって書かれた聖書を信じていればよいのですよ」とペトロさんは言っています。

さて、私たちは一か月ほど前に、韓国の Ewha（梨花）女子大学附属初等学校の五年生と先生方をお迎えしました。

Ewha と英和は英語の授業でのペンパルプロジェクト、お手紙交換をきっかけに姉妹校になりました。姉妹校とは、兄弟のような、お友だちの關係の学校ということですが、Ewha と英和は、幼稚園から大学院まである大きな学校であったり、英和は今年度一四〇周年ですが Ewha は来年一四〇周年を迎えるという同じような歴史があったりして、似ているところがたくさんあります。でもその中で一番共通しているのは、同じ神さまを信じる学校だということなのです。

講堂での歓迎会の中で、Ewha のハン先生が日本語でご挨拶をしてくださいました。

「英和と Ewha、両校はキリスト教の教えによつて設立された学校です。敬神奉仕と、真善美という精神を持っています。それぞれの表現は異なりますが、その持っている意味は、主の御言葉に従い、世界をよりよい場所にするための情熱と愛、という共通の心でつながっています」

私たちの学校のスクールモットーは、皆さんがよく知っている敬神奉仕です。Ewha 初等学校では「真善美」ということをスクールモットーにして、それがクラスの名前にもなっています。一年一組・二組ではなく、一年真組・善組とよばれます。

五・六年生の皆さんには授業でお話ししましたが、この「真善美」という言葉は、ある方の姿を現しています。真実な方、善い方、美しい心をもった方。どなたのことでしょうか。そうですね、イエスさまですね。イエスさまのように神さまの子どもとして歩んでいきましょう、というのがEWEBA初等学校のスクールモットーです。この言葉は、家庭科室と六年一組の教室の間にある、EWEBAコーナーにも掲げられているので、後では是非見てください。

日本だけでなく韓国だけでなく、世界中の人が、神さまの御言葉に聞いて過ごしています。

毎日皆さんが触れている聖書の御言葉が、いつかきつと皆さんを、いろいろなところで支えてくれることでしょう。

祈り続ける

小学部教諭 小國 翠

ルカによる福音書 一章五〜八節

また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいって、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。「友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。」すると、その人は家の中から答えるにちがいない。「面倒をかけるいってください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。」しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。

(二〇二五年六月二〇日の全校礼拝説教)

今日は雨ですね。東京は今週にも梅雨入りするのではないか、と言われています。晴れも雨も神さまからの恵み

だと分かっているのですが、それでも先生は、雨がちょっと苦手です。服や靴が濡れたりするのも嫌ですが、それはレインコートや長靴などを着ればなんとか防げます。でも、先生には雨が降るとどうしても苦手になることがあるのです。それは、持って出た傘を家に持って帰ること。

先生は、小学生の頃から皆さんと同じように、電車で学校に通っていました。もちろん、晴れの日も雨の日も電車に乗って通うのですが、雨の日は、必ずと言っていいほど、お母さんから「傘、忘れないでね」と言われていました。私は、長時間同じ電車に乗るので、電車の中では座っていたのですが、座席の端っこに座ると手すりがあるので、傘を持っている時には、いつもそこに傘をかけていました。そうすると、手も空くので、本を読んだり、時には居眠りをしてしまったりして、降りる駅に着くと、傘をかけたことを忘れてしまうのです。電車から降りてランドセルやバッグを整えている時に「あ！」と思って電車のほうを振り返って見ると、もう扉は閉まっています。先生の傘は次の駅へと運ばれて行く……こんなことがしょっちゅうだったので、先生は、ついに傘を買ってもらえなくなりました。自分のお小遣いで買えば大事にするでしょ、とお母さんから言われて自分で傘を買うようになりましたが、それでもなくしてしまって、これまでに多分一〇本以上はなくなっていると思います。電車の落とし物センターに連絡をして、見つかった傘もありましたが、大抵は見つけられずにお別れになっています。なので、先生は、雨の日は、実はどきどきしながらお出かけしているのです。

雨が降っている日、傘を忘れたり、先生みたいに途中でなくしちゃったりしたお友だちがいたら、皆さんならどうしますか？ 皆さんはとっても優しい人たちなので、「一緒に入ろう」と一つの傘を二人でさしながら登校するかもしれませんね。実際、そうやって二人で一つの傘に入って登校して、体の半分、制服がびしょびしょになって

いるお友だちを先生も見ることがあります。困っているお友だちがいたら親切にしてあげたい、親切にしなければいけない、と思うのは人としてとても大切なことですよね。

では、もし、夜遅くに玄関の扉がたたかれ、友だちから「何か食べ物を分けてください」と頼まれたら、どうでしょう。まわりはもう寝静まっています。起きて、扉の音に気がついたのは自分だけ……。そんな夜中に食べ物に分けてください、と言われてすぐに準備することなんて、いくらなんでも大変なことです。「ごめんなさい。もうみんな寝てしまっていて、今から食事を準備するのはとても無理です」。そう断るのが普通ですよ。

でも、「いや、本当に困っているのです。お願いです。ちょっとだけでいいので、何か分けてもらえませんか」と何度も何度も頼まれたらどうでしょう。「そんなに困っているなら……」と食事の用意をしてあげようと思いませんか。可哀そうだな、何かできることはないかな、と考えますよね。

イエスさまは、神さまと同じですよ、とお弟子さんたちにお話ししました。今日六年生に読んでもらった聖書の箇所の前部分は、主の祈りが書かれています。お弟子さんが、イエスさまに、「私たちはどうやってお祈りをすればいいですか」と聞いた時に教えてくださったのが「主の祈り」で、東洋英和に通う私たちは、朝の会、全校朝礼、そして今日の全校礼拝でも、みんなで唱えています。私たちは、毎日、この主の祈りを唱えています。イエスさまは、お祈りも、何度も何度もすることで、神さまは必ず聞き入れてくださるから、お祈りをするをやめてはいけませんよ、とお弟子さんたちに伝えていました。先ほどお話しした、夜中に食べ物をもらいに来たお友だちの話をとえ話としてお弟子さんたちにお話しなされたのです。

久しぶりに自分の家を訪ねてくれた友だちに何かおもてなしをしたいけど、自分の家には何も無い。あ、そう
だ、お友だちの家に行ってみよう、そして何か分けてもらえないか聞いてみよう、そう思った家の主人は近くの友
だちの家に行き事情を話して、パンを分けてもらえないか、と何度も何度もお願いするのです。みんなが頼まれた
側だったらどうしますか。一度は断ったとしても、本当に困っている人を目の前にした時には、きっと、その願い
ごとを聞き入れようと、いろいろ考えerと思うのです。イエスさまは、それこそ神さまの姿なのです、とおっしや
いました。神さまは、祈って祈って祈り続ける私たちには、必ず手を差し伸べてくださいます。だからこそ、祈り
続けることをやめてはいけません。イエスさまがここで言っている「パン」とは、神さまからの聖霊であり、
その神さまからの聖霊は、神さまへ祈り続けることで、初めて受け取ることができるのです。だからこそ、私たち
は、毎日祈りを捧げて神さまから愛をいただけるようにもとめているのです。

ペンテコステは、教会のお誕生日と言われています。教会は、生まれ育った場所も性別も関係なく、神さまに心
をむけてみんなで祈りを捧げることが出来る場所です。東洋英和に通う皆さんには、教会だけでなく、学校でも祈
る場所が与えられています。祈れる場所があるということ、祈ることが出来ることに感謝しつつ、これからも神さ
まに祈り続けましょう。昨日のペンテコステ礼拝でお話ししてくださった渡邊牧師先生は、ミャンマーに住むお友
だちのために、毎週金曜日に祈り続けているとおっしゃっていました。きっと、これだけお祈りしているのですか
ら、神さまは必ず聞き入れてくださることでしょう。さて、皆さんは、誰のためにお祈りしますか。心を天に向け
て一緒にお祈りいたしましょう。

神さまがみていてくださるから大丈夫

東洋英和幼稚園保育主任

渡 辺 みな子

創世記 八章二二節

「地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも

寒さも暑さも、夏も冬も

昼も夜も、やむことはない。」

お休みの間、幼稚園の庭には小鳥がよく遊びに来ていました。池の上にあるサルスベリの木の実がおいしいように、たくさんのお芋がピチピチおしゃべりしながら実をつついていました。

ある日は、モミジの葉が散って、風に吹かれてふわふわとお布団のようにふきだまりに集められていました。薄い赤や茶色、緑色の落ち葉があんまりきれいだっただけで、みんなに見せたくて、掃除をしないで大切にとっておいてあります。

去年植えた水仙の球根からでてきた芽もずいぶん大きくなりました。春になったらきつと黄色いきれいな花が咲

くでしょう。

寒い寒い冬でも、幼稚園の庭には楽しいことやうれしいことがあちらこちらで見つかります。

自転車の車庫の屋根になっているところにアイビーのつるが絡んで、緑の家のようになっていましたね。ところが段々と色が緑から茶色になって、枯れていつてしまいました。木のことをよく知っている植木屋さんに聞いてみると、根つこのところが病気になってしまっているのです、もう元気にはならないので切るようになるということでした。先生たちはとても悲しみましたが、同時にいいことも思いつきました。ベツレヘムの馬小屋を作るのにちょうどよい材料になると。

そうして、いちようの木の下の、子どもたちと作った馬小屋には、枯れたアイビーの屋根がつかまりました。年中組と年長組の子どもたちは裏庭にも馬小屋があつたのを知っているかしら。隅っこのお日さまが当たるところに同じようにアイビーで馬小屋を作りましたね。馬が来るように馬の匂いのする木のくずをまいたり、食べ物をいれる飼料葉おけを作ったりしました。そして、ぴかぴか黒く光る石や、なにかいいものを見つけると、馬小屋のイエスさまの所に持っていきましたね。

神さまは、サルスベリの実をつつく小さな小鳥のことも、モミジのことも、アイビーのことも、水仙のことも、私たちのことも、同じように大切に思って愛していてくださいます。悲しいことや困ったことがあっても、ちゃんとその先に、「こうするといよいよ」と道を用意してくださっています。だから大丈夫です。新しい年も、神さまがお話ししてくださる言葉をいつでも聞くことができるようにしていきたいですね。

ぶどうの木の下で

大学付属かえで幼稚園保育主任

永瀬真澄

ヨハネによる福音書 一五章一節

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。」

ヨハネによる福音書 一五章五節

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」

— 四歳児クラスの礼拝にて

(この日の礼拝は五歳児クラスの入り口の前にあるぶどうの木の下に椅子を並べてしました) —

かえで幼稚園にはたくさんの木があります。きれいな花を咲かせる木もありますし、美味しい実がなる木もあります。のほら組(三歳児クラス)の前にあるのは桜の木です。春にはきれいな花が咲いたのを覚えていきますね。畑の向こうにはキンカンの木があります。冬にキンカンをおいしい」と言って喜んで食べていた子どもたちもいま

すね。

私たちの上には何が見えるでしょう。

「ぶどう」（子どもたちがぶどうの実を上げて口々に言う）

そうですね。私たちが見上げているのはぶどうの木とぶどうの実です。かえで幼稚園の庭にはぶどうの木が二本あります。ここにあるのは鳥が運んできたタネからいつの間にか大きくなったぶどうの木です。

もう一つ、小屋の近くにある木は、「幼稚園の庭にぶどうの木があったらいいな」と考えた先生が植えたぶどうの木です。今年もぶどうの木の枝がどんどん伸びて、ぶどうの実がたくさんなっています。

春になるとぶどうの木には花が咲きます。ぶどうの花は桜の花やチューリップのように目立つ花ではありません。小さな花です。花が咲いているのに気がつかない人も多くいます。その花が終わってその後にはぶどうの実が育っていきます。

ぶどうの実が大きくなって美味しく食べられるようになるまでにはいろいろなことがあります。強い風が吹く日があります。強い雨が降る日もあります。おひさまが照り付けてぶどうの実がからからに乾いてしまうこともあります。雨がなかなか降らない年もあります。強い風が吹いてきて枝が折れてしまうこともあります。雨の勢いがすごくて実が落ちてしまうこともあります。枝が折れてしまったら、枝の先についている実は大きくなるできません。地面に落ちてしまった実はそれ以上大きくなることもできません。幹につながついていなければ、水も栄養も受けることができずに枯れてしまいます。

最後まで枝が折れずに、木（幹）と枝についていた実だけが甘くて美味しいぶどうになります。

聖書に「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」という言葉が書いてあります。イエスさまが教えてくださいました言葉です。イエスさまは私に繋がっていないさい。離れないでいなさい。と教えてくださいました。そうすれば、あなたは美味しいぶどうの実のように神さまに愛され、神さまからの良いものをいっぱい受けて過ごすことができますとおっしゃっています。神さま（イエスさま）から離れてしまったら、安心して過ごすことができなくなってしまう。神さま（イエスさま）は私たちが安心して過ごせるように、困った時、嬉しい時、友だちとどのように過ごしたらいいかわからなくなってしまった時にもどうしたらいいか教えてくださいましたために私たちに繋がってくださっています。

友だちに「一緒に遊ぼう」と誘われても一緒に遊びたくない時もあります。どんな言葉で言ったらいいかなと考えた時、イエスさまだったらどうなさるのかな、神さまがどのように教えてくださいましたのかと聖書を読むと書いてあります。

私たちには心が嵐の中にいるような日もあります。でもイエスさまが繋がって守ってくださいますから大丈夫です。私たちもイエスさまにつながっていけるように神さまにお祈りをしましょう。



大学の礼拝
(お昼休みのひと時、礼拝堂に集い、
パイプオルガンの奏楽に合わせて讃美します)

東洋英和女学院 説教集 第八号

発行日 二〇二五年一月六日

編集 宗教教育委員会

発行 学校法人東洋英和女学院

東京都港区六本木五丁目一四番四〇号

☎〇三・三五八三・三三二五

